多様性って、何？

「違いを楽しんで 外国人も暮らしやすい社会に」

社会福祉士・JICA関西 国際協力推進員の村松紀子さん

「多様性」をめぐるテーマの一つとして「在住外国人」を取り巻く状況にスポットを当てようと、社会福祉士の村松紀子（むらまつ・のりこ）さんに話をうかがいました。村松さんは兵庫県内で暮らす在住外国人を長年にわたって支援し、昨春からは神戸市にあるJICA関西（国際協力機構関西センター）の国際協力推進員も務めています。

――どんな活動をされているのでしょうか？

自治体国際化協会のアドバイザーとして全国の自治体の外国人相談窓口に助言をしたり、外国人にわかりやすく伝える「やさしい日本語」講座の講師をしたりしています。また、在住外国人が行政窓口や医療機関を訪れる際の「コミュニティー通訳」や「医療通訳」を担い、その通訳者の育成にも携わっています。JICAでは「多文化共生」分野の担当をしています。

――外国人の支援に関わるきっかけは？

1988年にJICAの青年海外協力隊に参加し、スペイン語圏の南米・パラグアイに派遣されました。日系人も大勢暮らしている国です。野菜栽培に3年余り従事し、帰国して周りを見渡すと、スペイン語での相談先も支援者もまだまだ少ないことに気づいた。それなら私が相談員をしよう、と。海外から遠路はるばるやって来た人たちの役に立ちたいと思いました。昨春までの30年間は、兵庫県国際交流協会でスペイン語の生活相談員を務めていました。

――どんな相談が多いのでしょう？

1995年の阪神・淡路大震災の後、相談がグッと増えました。

最初はお金をめぐる話が多くて。専門知識が必要だと思い、ファイナンシャルプランナーの資格を取って税金や社会保険の相談にも乗るようになりました。数年後には震災後のストレスからくる病気が増えてきました。通訳として通院に同行するうちに「医療通訳を制度化したい」と痛感し、新たな社会システムづくりを目指して「医療通訳研究会（MEDINT）」を作りました。今も活動を続けています。

――どうして社会福祉士に？

家族の誰かが病気になると、生活困窮に陥ったり家庭不和になったりします。相談内容も複雑になってきて、福祉につなぐ必要が出てきました。

外国人の生活相談って、言葉さえ話せれば誰にでもできると思われがちなんです。「井戸端会議の延長でしょ？」みたいな。決してそんなことはない。私は福祉の専門家として外国人の相談を受けたい、対応の質を上げたいと思い、2013年に社会福祉士の資格を取りました。外国人も暮らしやすい社会に変えたい。支援の理論を学び、社会に働きかけていく「ソーシャルアクション」を強く意識するようになりました。相談者の「自己決定」も一層大切にしています。

――通訳の現場では、さまざまな葛藤もありそうです。

医療通訳を始めた際にまず感じたのは、「子どもたちに通訳をさせないようにしたい」ってことでした。親は自分の子どもなら通訳費も無料だし、秘密も守ってくれるから安心だと言う。でも、子どもが通訳をした結果、父親にがんの告知をしたり、「僕は足を切断することになったよ」と母親に伝えたり、2万円と2000円の訳を間違えて親に激怒されたりといったことが実際に起きている。両親の離婚調停の通訳をしたケースもあると聞きました。精神的な負担が大きすぎます。

医療や行政・司法機関は「子どもに通訳をさせちゃいけない」って、どうして判断できないのかな、と。海外には子どもにコミュニティー通訳をさせてはならないとしている国もある。日本でもこのような通訳は第三者の大人が担うべきです。権利として、制度として確立する必要があると考えています。

――私たちは、日本で暮らす外国人にどのように接していけばいいのでしょうか？

在留外国人の数は2022年末の時点で307万人余りとなり、初めて300万人を超えました。都道府県単位の人口に例えると、10位の静岡県の365万人に次ぐ規模。もうマイノリティーとは呼べないレベルです。

でも、日本の人たちからは、まだ見えにくい存在なんでしょうね。ご近所トラブルの通訳をするとよく、「郷に入っては郷に従えでしょ？」と言われます。日本語を話せたり、日本人っぽい振る舞いをしたりするなら、仲間として受け入れるけど、と。「共生」よりも「同化」を求める声が根強い。

もちろん日本にも良い部分はいっぱいあります。日本にやって来た外国人には、ただでさえ言葉の壁、文化の壁、制度の壁が立ちはだかっている。大抵は、日本社会に溶け込もうと頑張っています。日本食を食べたり、電車に乗る時にはきちんと並んだり。でも、宗教的なことなど、変えられない文化や慣習もある。

日本の人たちには、むしろその違いを楽しんでもらいたい。外国人もこの社会の一員だという意識が当たり前になってほしいと思います。

――村松さんが考える多様性とは？

スペイン語の生活相談員をしていた時は、いつも怒っていたような気がします。ちゃんと届かない支援、理不尽な制度の壁、人の尊厳に対しての線引き……。多様性って、そんなに特別な言葉じゃないと思うんです。外国人も含めて地域に暮らす人たちが「私はこうしたい」と素直に言えて、それぞれの持ち味を生かして、できることに取り組んでいく。みんなが認め合える、そんな社会のことなんじゃないでしょうか。

社会福祉士でJICA関西の国際協力推進員の村松紀子さん（右）と、JICAのインターンシップ（就業体験）に参加していた関西学院大学大学院・人間福祉研究科の坂本和泉さん。
坂本さんは「学ぶうちに、労働や女性をめぐる課題は世界共通だと知りました。福祉分野と国際分野は密接につながっていると感じます」と話してくれました。

■ JICAプラザ関西

JICA関西の１階にあり、誰でも立ち寄れる「国際協力・開発教育の情報発信基地」として、国際協力やSDGs（持続可能な開発目標）に関する情報を一体的に発信しています。
JICAの事業や世界各国の民族衣装・民芸品を紹介する「広報展示室」や、エスニック料理が気軽に味わえる「JICA関西食堂」などがあります。ぜひ一度、足を運んでみてはいかがでしょうか。

住所：神戸市中央区脇浜海岸通１-５-２